
彼女の彼女の彼女の、

風月莢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女の彼女の彼女の、

【Zマーク】

N48888C

【作者名】

風月莢

【あらすじ】

死神と現実主義者の最期のやり取り。

(前書き)

掲載中の短編小説「彼女の言葉は真実か」「彼女の言葉の裏側に」続編です。宜しければ先に前二編」一読下さい。

重い湿度をたっぷりと含んだ夏の夜。あくまで現実主義を自負する俺の前に、伶俐な空気を纏つた黒髪の女が佇んでいた。

彼女は左手に何かを持っている。だが俺にはそれが何か分からぬ。何かを持つている。『何かを持つている』ということだけしか分からぬ。

その物体が『なに』か、俺には考へることができない。まるで脳の一部分だけ、麻酔がかかつっているように。

あれは一年前だ。

彼女は前触れもなく現れて、俺を『殺しに来た』と言つた。自称『死神』だなんていう、悪趣味なロマンチストだ。

俺は誰かに命を狙われるような憶えはなかつたが、彼女を気に入つたから迎え入れた。はいどうぞと殺されてやるつもりは毛頭なかつたが、俺のこれまでのみみつちい人生と、この『死神』との駆け引きを天秤にかけた時、彼女のどこか諦めきつたような氣怠い魅力が勝つたのは確かだ。

殺しに来たけど、生きたかつたら逃げてもいいわ。

彼女はそう言つた。

随分寛大な死神だな。

俺が笑うと彼女は意外なほど真剣に目を伏せた。

それから丸一年。その『死神』は、ふとした時に現れて気付くといなくなつていて、全く理解し難いシチュエーションを繰り返していた。一体どこから現れてどこへ帰るのか俺は知らない。そもそも俺の知つた事ではない。ただ分かっているのは俺の行動が彼女に筒抜けらしいということだ。でなければそんなに都合良く顔を出せ

るわけがない。

付かず離れず、絶対的な存在を感じるのに捕らえることは出来ない。ほらまた今夜も。

「こんばんは」

振り返る先に彼女がいる。いつの間にこんなに近付かれたのか分からぬ。

「おう

「今日も無防備ね」

会う度に言われる言葉だ。今日も無防備ね。無防備でいることを咎められている気がする。

俺は明日も無防備でいよひと思ひ。その言葉が唯一、彼女の生身の言葉に聞こえるからだ。

「ねえ、まだ、…明日があると思つてる?」

それは夏と形容される季節」と凍るような、何の感情もない口調だった。

ああ。そつか。

彼女は優秀な野良猫に似て、音もなく俺に近付いてくる。近付いてくるのが見える。が、気配はない。

不穏な光を宿した、いつそ芸術と呼びたくなるほど深い、黒の瞳が、俺を捕らえる。

「逃げないの

彼女が囁く。俺は笑つた。

狂つてるのは俺だ。彼女じゃない。

「逃げて、くれないの」

そう言われて、どのぐらい心地良いか教えてやれたら。
彼女の左手が視界を横切つた。不思議な衝撃と、浮遊感が俺を包む。
最後に見た彼女の顔は、ずたずたに傷付いて見えた。

(後書き)

続編掲載中です。

NEXT「果てない夜、主題は銀の月」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4888c/>

彼女の彼女の彼女の、

2010年10月19日14時28分発行